

南の風

Shaplaneer
since 1972

vol. 292
2021.June

特集

独立から50年、
 Bangladesh の歩み

Contents

特集

独立から50年、 Bangladesh の歩み

- 4 Bangladesh の50年の歴史を振り返る
- 6 Bangladesh を牽引する市民が語る、独立50周年
- 9 この人に聞きたい in Bangladesh
「人間性の高い、将来のリーダーを育てたい」
ツアー会社経営者／ガイド／通訳 モハマト・シャヘ・アロムさん
- 12 Bangladesh 独立50周年を振り返って
- 13 ユース世代と共に考える
～「THE★FORUM」 「学生向け連続講座」開催の報告～
- 14 プロジェクト・ニュース
子どもが安心、児童労働フリーの町へ、自治体を支援（ネパール）
環境に配慮した生活スタイルを考える（Bangladesh）
- 16 理事・評議員からのメッセージ
「SDGsと途上国のソーシャルビジネスへの社会的投資」
シャプラニール評議員／ARUN合同会社代表
功能 聡子
- 19 今年も全国からはがき・切手が集まりました！
「あなたのはがきが、だれかのために。」キャンペーンのご報告
- 20 シャプラバ
ボランティアを通じて得られるもの
ボランティア 齋藤 督之さん
- 21 シャプラ文化部
ヒマラヤを南に臨む秘境「ムスタン」
- 22 **新コーナー** スタッフの想い
働く子どもたちが、素敵な未来を描けるように
Bangladesh 事務所 プログラムオフィサー マフザ・パルビン
- 24 10年目のいわきツアー報告
- 25 クラフトリンク
#Who_is_She? Bangladesh の生産者のいま
- 26 **新コーナー** ツナガル掲示板
- 27 お知らせ



Bangladesh、ノルシンディ県のとある小道。この地で、パートナー団体「PAPRI（パプリ）」が活動している。PAPRIは1999年にシャプラニールから独立し、Bangladesh 人だけで運営しているNGO。独立後も、中洲での子どもたちへの教育支援、障害者支援をともに行ってきた。（撮影：渋谷敦志）



「誰も取り残さない。」

社会のさまざまな制度や仕組みから取り残され、すべての人が持つ豊かな可能性が奪われてしまうことがあります。

私たちは人に寄り添い自らも当事者になることで社会課題の解決を進めています。

貧困のない社会の実現をめざして。

南の風 通巻292号（季刊）

2021年6月1日発行

発行元 特定非営利活動法人
シャプラニール＝市民による海外協力の会
発行人 坂口和隆
編集長 小松豊明
編集 京井杏奈 原園心 宮原麻季
デザイン 柴田篤元 (matricaria.)
印刷 株式会社上毛印刷

東京事務所
(火曜から土曜10:00～18:00、日曜、月曜、祝日定休)
〒169-8611
東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863 FAX 03-3202-4593
E-mail info@shaplaneer.org
Web <https://www.shaplaneer.org/>



特集

独立から50年、 Bangladesh の歩み

Bangladesh は2021年3月26日に独立50周年を迎えました。独立戦争直後、荒廃した Bangladesh は50年という短い期間で劇的な変化を遂げています。シャブラニールの活動も、独立翌年の1972年に日本の若者有志が行った復興協力支援から始まり、援助から共生へと大きく変化させてきました。

この50周年は、 Bangladesh シュとともに成長してきた仲間であるシャブラニールにとっても記念すべき日です。

本特集では、 Bangladesh シュの50年の歴史を振り返るとともに、変わりゆく Bangladesh シュ社会の中で暮らす人々の声をお届けします。過去を振り返るだけでなく、未来に目を向け、 Bangladesh シュの人々とともに残された課題について考えたいと思います。

バングラデシュの人口、日本の人口を抜く

狭い国土に対し多くの人口を抱えるバングラデシュは、人口密度が世界で最も高い国の一つである（1平方キロ当たり、1050人）。1998年にはその人口数は1億2400万人に達し、以降日本の人口を超え成長し続けています。



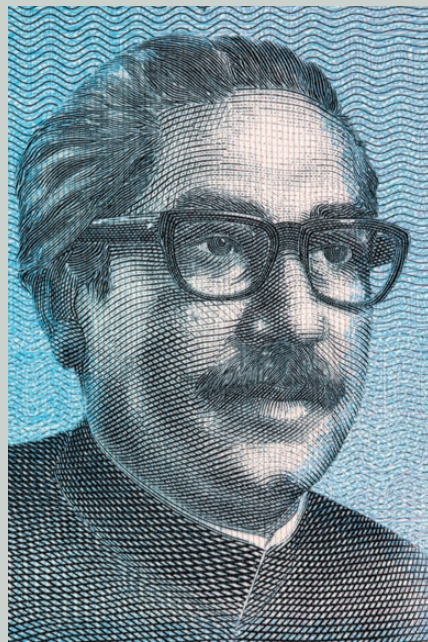
1998年のダッカの街並み

大規模な災害に悩まされる

20世紀最大とも言われる未曾有の大規模洪水が発生。また1991年には大きなサイクロンがバングラデシュを襲い、14万人が犠牲となりました。雨季の大雨・川の水位上昇、サイクロンなどにより自然災害が発生しやすいため、シャプラニールは緊急救援を実施してきました。



上)サイクロンで壊された家 右)サイクロン緊急救援



初代・第4代大統領ムジブル・ラーマン

1998 1991 1988 1972 1971

民主化へ、新しい時代へ

総選挙によりBNP (Bangladesh Nationalist Party) のカレダ・ジアが初の女性首相に就任。1975年から1990年まで、事実上の軍政であったものが、1991年以降本格的な議会制民主主義に移行することとなりました。



バングラデシュ国会議事堂

活動の大きな第一歩が始まる

1972年日本の青年ボランティアが「バングラデシュ復興農業奉仕団」としてバングラデシュへ派遣され、その有志によりシャプラニールの前身となる「HBC(ヘルプ・バングラデシュ・コミティ)」が設立されました。1973年には吉田ユリノ氏を通信員として派遣。1974年にはダッカに事務所が設立されました。



畑を耕すバングラデシュ復興農業奉仕団

開設直後の事務所でのミーティング (左が吉田ユリノ氏 撮影:吉村繁)

独立！ バングラデシュの歴史が始まる

50年代に始まった「ベンガル語をパキスタンの公用語に」という運動が自治権運動に発展。1971年3月にパキスタン政府による弾圧に抗して独立が宣言され、独立戦争を経て、同年12月にバングラデシュはパキスタンから独立。ムジブル・ラーマンが初代大統領に。



独立して間もないバングラデシュの風景 (オールドダッカ、1974年 撮影:吉村繁)

Bangladesh の50年の歴史を振り返る

1947年に英領インドからインドとPakistanが分離独立したとき、当時のPakistanは西Pakistan（現Pakistan）と東Pakistan（現Bangladesh）で構成されていました。そこから1971年に東Pakistanが独立し、新たな国としてBangladeshが誕生。独立から50年を経て、Bangladeshはどのように変わったのでしょうか。その歴史的な出来事をピックアップし、ご紹介します。

ロヒンギヤの人々が難民として Bangladesh に

ミャンマー西部に住むイスラム系少数民族ロヒンギヤとミャンマー政府の治安部隊が衝突。100人以上のロヒンギヤが殺害されたとされる事件をきっかけに、70万人を超える人々が国境を接するBangladeshへ押し寄せました。今もなお多くの人が難民キャンプで生活しています。



ロヒンギヤ難民キャンプ

縫製産業が大きく成長

縫製産業が大きく発展し、世界2位の縫製品輸出国となったBangladesh。一方で2013年に起きた、多くの縫製工場が入ったラナ・プラザビルの崩壊事故の悲劇は劣悪な労働環境の問題を世界に訴えかけました。



縫製工場で働く女性たち

現在 2017 2012 2013 2006

50年で大きな経済成長を遂げてきたBangladeshは、2024年以降に後発開発途上国を卒業するとされています。COVID-19の感染はまだBangladeshでも続いているが、日本からの支援で開始された都市高速鉄道計画（2013年～）や、Bangladesh初の通信衛星の打ち上げ（2018年）、初のトランスジェンダー向けイスラム神学校の開校（2020年）など、Bangladeshは前に向かって歩み続けています。



現在のダッカの街並み



COVID-19禍の市街

貧困者数が半減！

1990年から2015年までに貧困者数を半減させることをターゲットとしていたミレニアム開発目標（MDG：Millennial Development Goal）が前倒しの2012年に達成されました。しかし、現在も国民の4人のうち1人は貧困とされています。



貧困者数が半減するも未だ国民の4人のうち1人は貧困

快挙！ユヌス氏 ノーベル平和賞を受賞

貧困層に対し低利・無担保で少額の融資を行う「グラミン銀行」の創設者であるムハマド・ユヌス氏が、当該銀行とともにノーベル平和賞を受賞。「マイクロファイナンス」や「ソーシャルビジネス」が注目されるようになり、ビジネスで社会課題を解決する考え方が広まりました。



ムハマド・ユヌス氏とシャブラニール 監事の大橋氏

独立50周年

独立戦争に自ら参加してバングラデシュの礎を築いてきた人や、これからのバングラデシュをつくっていく担い手となる若い人たちなど、今を生きるバングラデシュの人々は独立50周年をどのように感じているのでしょうか。自分が今いる場所で活躍する人々にお話を伺いました。

ファヒム・アフサール・ブイヤンさん(20代)

90年代初頭に生まれた私は、自分の国や周りの環境の大きな変化を目の当たりにしてきました。バングラデシュは、個人のベーシックニーズ、キャリア、家族計画、安全などに直接関係する分野で発展しつつあります。しかし、優先されずに取り残されている分野もあります。若い世代の一員として、現在および次の世代に手ごろでクリーンなエネルギーを提供することが特に重要視されるべきだと感じています。私自身、持続可能なエネルギーのプロジェクトにかかわり、周りの人々を巻き込んでいきたいです。風車、水力発電所、ソーラーパネル、バイオ燃料、電気自動車等の普及は、バングラデシュの全体的な発展に良い効果をもたらすと思います。

バングラデシュの更なる発展のために、海外の学位取得を目指す大学生

家事使用人として働きながら学校に通う、支援センターの頼れるチャイルドリーダー



タスリマ・カトウンさん(10代)

私が自分の国の一番好きなのは、人々がとても親切であることです。バングラデシュ人は困った人を助ける心構えと、ボランティア精神を持っています。私も先生や周りの人々からその価値観を教わりました。さらに、バングラデシュの人々にはおもてなしの心もあります。

将来、バングラデシュは先進国となり、他の国からも注目される開発のロールモデルになるでしょう。そして、誰もが幸せな国として認められるようになるでしょう。私は、バングラデシュが児童労働のない、男性が女性を見下さない、女の子でも望む通りの教育が受けられる、夢のような国になることを望みます。私自身も、自分の夢をかなえるために頑張っていきたいです。

Bangladesh を牽引する市民が語る、

アブドゥラ・アル・マムンさん(40代)

Bangladesh は50年前に独立した日からの長い道のりを、極めて順調に歩んできました。出発時点は明るい将来が期待できない状況でしたが、プライマリヘルスケア※、初等教育、男女平等などの指標において画期的な成果を上げたことにより、わずか50年で「開発モデル」の見本となりました。後発開発途上国から抜け出し、中所得国の仲間入りをすることができたのです。しかし、その開発がもっと平等に分配されるべきだという声も挙げられるようになりました。今後も、 Bangladesh は民主主義、人権、言論の自由、法の支配等の確立を目指す必要があります。**50年の歴史を持つこの国の一番の課題は、開発とガバナンスの改善を両輪で進めることです。**

※「すべての人々に健康を」の目標のもと、すべての人々に健康を基本的な人権として認め、その達成の過程において住民の主体的な参加や自己決定権を保障する理念のこと。



Bangladesh と日本をつなぐ、ダッカ大学日本研究学部の学部長

国際的な場面で幅広く活躍するNGOコンサルタント、防災・減災研究者、建築家



サンギタ・ラジュボンシ・ダスさん(40代)

私は自国の存在そのものを誇りに思っています。 Bangladesh の著名な歌手である父は1971年に独立戦争に参加し、母とその兄弟も参加しました。戦争とこの国の誕生は、私の家族、そして私自身の成長の中でも非常に重要な出来事なのです。

過去20年間で Bangladesh は大きく変わりましたが、今もなお多くの変化が進行中です。特に現在建設中の都市高速鉄道は劇的な変化をもたらすでしょう。しかしながら私は、**大都市にとどまらない、よりバランスのとれた計画的な成長を望んでいます。**デルタ・プラン（幅広い分野にかかる50年～100年越しの超長期計画）といった戦略的な計画が確実に実行されるように、定期的な目標を設定して進むことが必要であると思っています。

モンズル・ホックさん(60代)

50年前、私たちは手ごわい敵と戦い、国を解放しました。私を含む25万人が命を危険にさらし、戦地に赴きました。多くの一般人が兵士となったため、私たちは十分な軍需品を持っていませんでしたが、どこへ行っても人々は熱心に私たちを保護し、食べ物を与え、敵に関する情報を提供してくれました。バングラデシュの独立は、民衆の団結の上成り立ったのです。

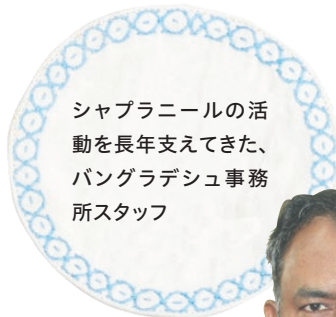
バングラデシュが生まれたての頃は、グラグラしながらも自分の足でゆっくりと立ち上がる子どものようでした。1975年に初代・第4代大統領ムジブル・ラーマンが殺害されてからは軍事独裁政権が続き、バングラデシュの開発は妨げられたまま、最初の20年が過ぎ去りました。

1991年に選挙で選ばれた政府が発足してから現在までの30年間は、発展が進みました。不安定だった子どもは歩き始め、健康な青年になることができました。私たちは、さまざまな革新的なアプローチを通じてそれを達成しました。**海外への人材の派遣、アパレル業界への投資、教育を通じた次世代への投資など、必要とされる投資がされたおかげで、南アジアの主要国になることができました。**

若い世代の人たちは、私たちが経験してきた過去について知っておく必要があります。また、簡単には実現できなかった開発の成果を享受していることを認識しておくべきです。そうすれば、彼らは自分たちの国をさらに愛するでしょう。そして、私たちよりもさらに良い方法で自国に貢献することができるでしょう。



バングラデシュ最大の
日刊紙で活躍する
ジャーナリスト、独立
戦争経験者



シャプラニールの活
動を長年支えてきた、
バングラデシュ事務
所スタッフ



ルフル・アミン・ハウラダルさん(50代)

50年前は、いたるところで飢えた人達の声が聞こえました。衣食住、教育、医療などのベーシックニーズが充足されない中、当時の政府はさまざまな国に助けを求めましたが、他の国から差し伸べられる援助は十分ではありませんでした。このような恐ろしい状況を目の当たりにして、シャプラニールのような国際的な団体や国内で新たに設立された非営利団体がバングラデシュの人々の窮状に手を差し伸べた結果、徐々に状況が改善されました。この一連の進歩が今後も続くことを願っています。**今後は汚職の一扫、教育制度の改善、環境保護、子どもや女性の権利の保護などに取り組んでいくべきだと思います。**



この人に
聞きたい
in Bangladesh

ツアー会社経営者／ガイド／通訳
インタビュー・執筆／
バングラデシュ事務所長
内山智子

ツアー会社経営者／ガイド／通訳
モハマド・シヤヘ・アロムさん

人間性の高い、 将来のリーダーを育てたい



PROFILE

1987年から1997年の10年間日本で暮らし、日本の大学を卒業。バングラデシュに帰国後、ツアー会社JABA Tourを設立し、同時にさまざまな事業を展開している。JABA Tourのマネージングディレクターとして、経営のみならず、自身も経験豊富なツアーガイド兼通訳として活躍するほか、日本のテレビ局の現地コーディネーションや企業の通訳なども行っている。シャブラニールとは1991年からかかわりがあり、今までも多くのスタディツアーの受け入れを行ってきた。また、1995年からは実家の村で私立学校を運営している。

シャブラニールのスタディツアーでは、いつも通訳だけではなく、バングラデシュの豊かな歴史や文化を伝えてくれていたアロムさん。アロムさんとシャブラニールの関係は、30年にも及びます。

バングラデシュが独立50周年を迎えるにあたり、日本とバングラデシュの2つの社会を知るアロムさんにとって、今のバングラデシュ、そしてこれからのバングラデシュをどのように見ているのか、お話を聴きました。

——アロムさんと日本とのかかわりについて教えてください。

1987年、バングラデシュで学生運動が盛んな時期で、運動に巻き込まれたこと、家族が裕福ではなかったこともあり、出稼ぎで日本に行きました。

最初は電線のリサイクル工場で働きました。その後、解体工事会社の人と知り合いになり、その会社で働かせてもらうことになりました。その会社は家族経営の小さな会社で、体力的に

はきつい仕事でしたが、精神はとても健康的でした。この会社で働くまでは、嫌な扱いを受けたくしても我慢するしかなかったのですが、ここでは家族の一員として扱ってくれ、時に厳しく叱ってくれることもある、心の広い人たちがいた。この家族が私にとって一番の財産です。

一旦バングラデシュに帰ることになりましたが、平和な環境で学ぶ学生たちの雰囲気を見て、ぜひ日本で勉強したいと思いました。1年後に語学専門学校に入学することができ、日本に戻りました。その後、大学に入学し、2

年の時は奨学金をもらうことができませんでした。この学生生活の間、週末と夏休みなどの長期休暇期間は社長宅に泊まり、アルバイトをさせてもらいました。給料は、学費と生活費等を払った残りはすべて、バングラデシユの実家に送っていました。

——アロムさんにとって、日本の魅力はどのようなところですか？

日本人は、約束を守る、法律を守る、時間を守る。正直、相手を支配しない、相手を傷つけない。一生懸命やると認めてくれる、弱い人の足元を見ることが少ない。それらは、バングラデシユにも昔はあつたけれど植民地時代に奪われてしまった、と感じていたものでした。

——アロムさんとシャプラニールとの出会いについて教えてください。

シャプラニールに初めて出会ったのは1991年。専門学校の文化祭にシャプラニールがジユート製品を売りに来ていました。日本に来て初めてバングラデシユ製を見たので、すごく嬉しくてスタッフに声をかけたのがきっかけです。後日、事務所を訪問すると、バンガル語ができる人が何人かいただけではなく、バングラデシユのために活動をしている人がいる、

ということを知りとても嬉しかったです。

それまでは、私はバングラデシユ人ですと言うと、多くの人は国の存在すら知らなかった。聞いたことがある人でも、洪水の国、手で食事をする箸もスプーンもない国、という負のイメージばかり持たれていました。そんな中、シャプラニールの活動を知り、感謝の気持ちでいっぱいでした。次第に、自分ができることは何かと考え、バンガル語を教えたい、とスタッフに伝えました。スタッフは、早稲田奉仕園に話をしてくれて、バンガル語講座を開始することになったのです。

今までの日本での生活は、語学学校の外国人の友人しかおらず、建設現場で厳しく扱われる労働者としてのだけの存在でした。そのような自分に、日本人の友だちができ、さらには先生になれた、この経験が人生観を大きく変えました。

——10年ほど日本で暮らし、その後バングラデシユに戻られました。どのような想いがあつたのか、どのようなことをやってきたのか、教えてください。

1997年に日本の大学を卒業し、日本で就職活動をしました。しかしこの時、日本に残るか、バングラデシユに帰るかでも悩んでいました。なぜなら、家族を大事にしたいと思つたことと、今のバングラデシユにはビジネススタ

ンスがあり、成功すれば家族全体の状況が良くなる可能性があると感じていたからです。悩んだ結果、バングラデシユに戻っても日本とつながりを続けられるパッケージツアーを思いつきました。その会社名は、日本とバングラデシユを合わせたJapan + BangladeshでJABATourです。

最初は、年に2、3回しか仕事がありませんでした。シャプラニールのスタディツアー以外に日本の友人からの紹介などでも来てくれましたが、生活できるほどの収入にはなりませんでしたが、そのため、他の収入を確保するためにさまざまな事業を興しました。

出稼ぎで稼いだお金で少しずつ村の土地を買っていたため、どうにかなるだろうと不安は少なかったのですが、いつでも日本に行ける立場を築きたいと考えツアー会社を続けました。2005年くらいになってやっとJABATourの経営を中心とした生活ができるようになりました。



シャプラニールのスタディツアーで通訳をするアロムさん

——現在、私立学校を運営されています。どのような想いから学校運営をしようと思ったのですか？

1971年のバングラデシュ独立戦争の時、私は5・6歳でした。当時父は、サトウキビ糖の卸売りをしていたのですが、戦争によりビジネスは失敗してしまいました。日々お米を買うのが精一杯で、私は、家族を支えるためにいろいろな仕事をしました。そのため、学校の勉強についていけず成績は悪く、先生に怒られてばかりでした。当時、自分のまわりには、学校に行けない子もたくさんいた、そんな時代です。

そのような勉強の出来が悪くいつも怒られていた私が、日本の大学に通い、奨学金をもらえようになると信じられないほど嬉しかったです。この奨学金は神様からの贈り物だと思いい、このお金で学校をつくり貧しい家の子どもたちが通える学校を作りたいと考えるようになりました。

1995年に村で私立学校を開始しました。学校の名前は、日本でお世話になった家族の名前を入れ、「Sizue Kindergarten」と名付けました（Kindergartenとはバングラデシュでは私立学校のこと）。

昨年、25周年を迎え、小学校に加えてハイスクール（日本でいう中学校）も併設しています。1クラス25人の少人数性の質の高い教育

を提供し、生徒たちの成績は、県・郡でトップの成績を納めています。

この学校で、大切にしていることは、「人間性を育てること」です。責任を持った人間、人にやさしく弱い立場の人に対して心配りができる大人になってほしい、と考えています。先生たちにも、思いやりを持った将来のリーダーを育てる役割があなたたちにはある、ということを常に話しています。



開校25周年を迎えたSizue学校

——バングラデシュは2021年、独立50周年を迎えました。この50年ほどのような50年だったと思いますか？

前向きに進んできた50年だったと思います。女性の立場、子どもの健康、教育の機会、村人の生活レベル、などがあがりました。今では、1日仕事をすれば8、10キロのお米が買えます。そのため食べられないという人はほとんどいなくなりました。

この国は開発されましたが、大きな格差が生まれました。正直な再分配システムが働けばこ

のような差が生まれることはなく、すべての人たちの生活レベルがもっと上がったはずですが。

またこの国は義務教育など制度を整え、人々は賢くなりました。しかし、教育は勉強のできる人を生み出しただけではなく、ズル賢い面も育ててしまいました。教育（学校）の量は増えましたが、質は下がっている、と感じています。

環境も悪くなりつつあります。農業ではテクノロジーにより、市場競争に勝てるような品種や量は増えましたが、健康的で質の良い食料を得ることがとても難しくなってきました。

——これからのバングラデシュにどんなことを期待していますか？

人々の考え方をつくるのは教育です。学校教育だけではなく、マスメディアや社会からも多くの影響を受け、人は成長します。ですから、社会全体で責任を持った人々をつくるための質の高い教育が、将来のバングラデシュのためにとても重要です。近年、子どもたちは良い悪いの判断ができない年齢のうちから、多くの情報を浴びてしまっています。そのため、自分自身（感情や行動）をコントロールができなくなっていくことを心配しています。精神面の弱さにより、あやふやなものほどどんどんつぶされてしまふ。教育の中に、基本的な「質」を取り戻さなければならない、そう感じています。

バングラデシュ独立50周年を振り返って

文／宮原麻季（海外活動グループ）

バングラデシュの独立50年の歴史を振り返るというテーマで特集を企画した際に、シャプラニールとして、バングラデシュが歩んできた50年間の時間の流れの中で何にフォーカスをして組み立てるかを議論しました。私たちシャプラニールの活動は現地の人の生活に寄り添い、日本の人々にそれを伝え、課題を一人ひとりが自分ごとにしていく市民の力によって成り立ってきたものです。そのような団体だからこそ、今回の特集では、一人ひとりが今いる場所での活躍しながら、これからのバングラデシュをつくっていくこうとしている姿や将来への期待をお伝えしました。

独立翌年の1972年のバングラデシュのGDPが22億ドルであったのが、2019年には2099億ドルと大きく伸びており、GDPの内訳をみると85%が第2、3次産業によって構成されている一方、農業就業人口は減少傾向にあります（※）。このことから人々の生活スタイルや従事する職業も大きく変化していることが伺えます。



ただし、全員が変化の波に乗っているというわけではないでしょう。今回の特集で見えてきたのは、大きな変化の中にあっても、たくましく生活を切り開いてきた年長の人々、これからのバングラデシュをつくっていく多様な活躍を見せる若年層の姿です。農村部の人びとの話もお伝えしたかったのですが、コロナ禍において、直接話を伺うのが難しいという困難にも直面しました。独立から50年。バングラデシュは独立直後とは見違えるほど豊かになったと言えるでしょう。ただ、開発から取り残されてしまう人々の声は、ちゃんと聞こえなければならない事実なのだと思います。そして、未来に向けて私たちシャプラニールはバングラデシュの人々の今ある姿をしっかりと理解し、どう付き合っていくのか。変化が大きい社会だからこそ、よりの確に理解をし、柔軟に行動に移していくことが必要とされている姿勢なのだと感じています。

※世界開発指標 統計開始当初（1991年）69.5%だったものが最新（2019年）の数値が38.3%となった。